

令和元年〇月〇日

沖縄県〇〇部
〇〇 〇〇 殿沖縄県がん診療連携協議会議長
琉球大学医学部附属病院長
大屋 祐輔

沖縄県立宮古病院と八重山病院における、がんに係わる医療者等の配置に関するお願い

沖縄県がん診療連携協議会は、がん診療連携拠点病院の整備に関する指針（平成30年7月1日厚生労働省健発第健発0731第1号）に基づき琉球大学医学部附属病院に設置しており、地域がん診療連携拠点病院や沖縄県医師会等、県内の医療機関関係者と患者関係者による全県的な組織とし設立されております。その下部組織として、医療部会、緩和ケア・在宅医療部会、小児・AYA部会、離島・へき地部会、情報提供・相談支援部会、ベンチマーク部会の6部会が活動を行っております。

さて、離島・へき地部会では、沖縄県の離島・へき地におけるがん医療の在り方について、平成30年7月より4回、延べ8時間以上にわたり議論を重ねてまいりました。さらに、沖縄県がん診療連携協議会および同協議会幹事会でも昨年度の中心課題として、議論を行いました。

その結果、添付資料にありますように、北部医療圏、宮古医療圏、八重山医療圏において実施できるがん医療には、中部および南部医療圏との比較だけではなく、この3医療圏間でもかなりの格差があることが分かりました。また、その格差をもたらしている要因の多くは、各医療機関の設備等ではなく医療者の配置に依存していることが、改めて確認できました。

これらの格差を縮小するためには、この3医療圏にある医療機関のがんに係わる医療者等の配置を充実させることが最重要であると、本協議会として決議いたしました。そこで、本年度および来年度の県立宮古病院と県立八重山病院のがんに係わる医療者等の配置につきましては、添付の資料をご参照いただき、特段の配慮をお願い申し上げる次第です。

これら3医療圏のがん医療の充実のために、「離島・へき地の現状を踏まえた、がんに係わる医療者等の配置」を要望いたします。

お問い合わせ：

沖縄県がん診療連携協議会事務局
(琉球大学医学部附属病院がんセンター)

増田 昌人

TEL：098-895-1368 FAX：098-895-1497

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

子宮				
北 部	対応 状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	×
	婦人科標榜なし。 以前は県立北部病院へ紹介していたが、現在は産科のみの対応とのことで、中部の病院へ紹介している。			
医師	婦人科医0名。			
結論	当面は対応不可。			
宮 古	対応 状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	×
	大学病院に紹介。			
医師	その年に赴任した医師により、対応の可否が決まる。 今年度の化学療法の対応は不可。(来年4月以降は未定。) 応援の医師が大学病院からではなく、中部病院からなので、将来的に 人材不足が危惧される。			
結論	何とか対応可能な体制を確保する。 婦人科腫瘍に対応できる専門性のある医師が1人は必要。 目標設定として、基本的な手術・化学療法に対応できることが望ましい。 安定的なキャリアを持った医師の配置を強く希望する。 子宮頸がんと体がんでは、対応を区別する必要がある。手術に関して、頸がんでは難易度の高い広汎子宮全摘出術が適 応になり、婦人科腫瘍専門医が常勤する専門施設（琉球大、中部病院等）への集約が適切と考えられる。また、術後の 補助療法に関して、体がんでは化学療法が標準だが、頸がんでは放射線治療が標準であることを認識しておくべき。			
八 重 山	対応 状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	手術・化学療法は対応できている。			
医師	専門医は1名で、標準治療は対応可。 ※婦人科の腫瘍専門医が長期的に在籍することが前提。			
結論	何とか対応可能な体制を確保する。 婦人科腫瘍に対応できる専門性のある医師が1人は必要。 目標設定として、基本的な手術・化学療法に対応できることが望ましい。 放射線療法が絡む場合は最初から本島へ紹介するが、 比較的難易度の低い患者に対しては大概の治療は行いたい。 安定的なキャリアを持った医師の配置を強く希望する。 子宮頸がんと体がんでは、対応を区別する必要がある。手術に関して、頸がんでは難易度の高い広汎子宮全摘出術が適 応になり、婦人科腫瘍専門医が常勤する専門施設（琉球大、中部病院等）への集約が適切と考えられる。また、術後の 補助療法に関して、体がんでは化学療法が標準だが、頸がんでは放射線治療が標準であることを認識しておくべき。			

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

乳房				
北部	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	8～9割が温存治療。術後放射線治療は中部の病院へ。			
医師	週に2回、大学病院より乳腺専門医に来てもらい、連携して対応。			
結論	手術療法、化学療法は、院内にて可能。 術後放射線療法のみ中南部の病院へ紹介。			
宮古	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	術前後放射線治療は那覇へ。手術・化学療法実施。温存療法センチネル可。			
医師	その年に赴任した医師により、対応の可否が決まる。			
結論				
八重山	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	○
	センチネルを実施できる医師不在。手術・放射線治療は本島に紹介。			
医師	化学療法に関しては、基本的には術前・術後の治療を本島の病院と協力して行っている。 次年度から月に2回程度、乳がん専門医が終日外来診療をすることになった。			
結論	常勤の乳がん専門医の確保は難しいため、本島から乳がん専門医が定期的にサポートに入ることを要望していきたい。 今後の希望として、 第1段階：週に2～4回程度、外来に来てもらう。 第2段階：1泊の終日外来で手術に対応してもらう。 第3段階：常勤の乳がん専門医を配置する。			

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

肺				
北部	対応状況	手術 ×	放射線 ×	化学療法 ○
	医師	手術・放射線治療は他施設へ。診断・化学療法は実施。 呼吸器外科医不在。 呼吸器内科医にて化学療法実施。		
	結論	化学療法のみ対応可能、手術・放射線治療が必要な場合は、中南部の病院へ紹介。 呼吸器外科医の確保に努める。		
宮古	対応状況	手術 ×	放射線 ×	化学療法 ○
	医師	手術・放射線治療は沖縄病院へ。診断・化学療法は実施。 免疫チェックポイント阻害剤 オプジーボの使用が可能になった。 月1回、国立病院の医師が外来に来てもらい、呼吸器外科外来を開設した。 放射線治療などについて、内科の医師と治療方針を決めることが可能になったが、宮古での手術や放射線治療はまだ対応できない。		
	結論	術後管理に相当な専門性を求められるので、基本的に集学的治療を行う本島の病院へ紹介する。 化学療法に関しても、小細胞肺癌（LD）、非小細胞肺癌III期では放射線治療との併用タイミング（同時が標準）が重要であり、集学的治療（放射線治療）が実施できる本島の病院へ紹介する。		
八重山	対応状況	手術 ×	放射線 ×	化学療法 ○
	医師	診断・化学療法は対応可。月2回の出張医（呼吸器外科）。呼吸器内科常勤2名。 最近では診断で早期の肺がんが見つかる事も多いので、比較的難易度が低く、胸腔鏡などで対応可能な手術が、多く見積もって年間20例前後ある。（ただし、呼吸器外科の専門医がいて、適応範囲をすべて判断できる場合のみの件数である。） 現在はサポートで呼吸器外科医が来てくれているが、常勤の医師がいた時に比べてやや症例数は減っているものの、ある程度の数の対応はできている。		
	結論	術後管理に相当な専門性を求められるので、基本的に集学的治療を行う本島の病院へ紹介する。 化学療法に関しても、小細胞肺癌（LD）、非小細胞肺癌III期では放射線治療との併用タイミング（同時が標準）が重要であり、集学的治療（放射線治療）が実施できる本島の病院へ紹介する。 術後のアジュバントや4b期の患者の化学療法にはなるべく対応するが、手術に関してはサポートが得られるのであれば、無理のない範囲で限定的に対応する。 組織を切除して判断する症例が結構あるので、可能であれば術中迅速でがんが確定すれば手術を付加する場合もある。（リスクの低い症例に限る。）		

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

皮膚				
北部	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	△
	疾患によって大学病院と連携して対応。放射線治療が必要ななら大学病院に紹介。			
医師	常勤1名。 疾患によっては大学病院と連携。 化学療法は内容により対応可能。			
結論	放射線治療以外は、大学病院と連携して手術や化学療法を実施。			
宮古	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	×
	週1回の応援外来。			
医師	根治的な手術はしていないが、マージを取った生検は対応。 病理結果によって、琉大病院へ紹介している。			
結論	常勤の皮膚科専門医の配置を希望する。			
八重山	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	△
	化学療法・放射線治療は那覇へ。可能な範囲で対応。			
医師	ベテランの皮膚科医1名常勤。 化学療法は標準的なものに関して対応したい。			
結論	褥瘡対策やその他の事も含めて、皮膚がん診療のクオリティーを上げ維持していくために、皮膚科の常勤医の配備を強く希望する。 粘膜障害や皮膚障害が起こる化学療法剤が増えてきており、皮膚科医の副作用対応が望まれる。			

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

腎・尿路（膀胱除く）・前立腺				
北部	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	×
	大部分は大学病院に紹介。			
医師	泌尿器科医0名。			
結論	院内では対応不可。疑わしい症例は、中南部の病院へ紹介となる。			
宮古	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	泌尿器科医は常勤1名。			
医師	南部医療センターと兼任の医師がいたが、宮古に常勤になったので、継続的な治療が可能になった。化学療法は、ホルモン療法等を含めて行っている。			
結論	腎・尿路・前立腺の手術を行う。 将来的には腫瘍内科医を1名配備し、化学療法に対応してもらうのが望ましい。			
八重山	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	○
	腎・尿路は専門医が必要。現在は退職後の嘱託泌尿器科医1名。かなり切迫した状態。			
医師	開業医にも泌尿器科医がない。 腎臓に関しては、外科医の応援で手術できる場合もある。 化学療法は、嘱託医にお願いしている。リスクのある症例に関しては、指示をもらって、八重山病院の医師で対応している。			
結論	常勤の泌尿器科医の配置を希望する。 原則的には診断までを行い、手術に関しては本島の病院に紹介する。 将来的には腫瘍内科医を1名配備し、化学療法に対応してもらうのが望ましい。			

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

血液				
北部	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	○
	一部は開業医による化学療法可能。その他は、中南部の病院に紹介。			
医師	院内には血液内科医不在。 名護市内の開業医が1名、血液専門医であり、往診相談可能。			
結論	化学療法は内容により可能。			
宮古	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	×
	急性期はすべて送る。治療後の維持療法は実施。			
医師	月3回、血液内科医（中部病院と南部医療センター）の外来応援。 外来・入院の化学療法はなし。 内服の化学療法のみ。			
結論	急性白血病に関しては、診断をつけるために本島の病院に紹介する。			
八重山	対応状況	手術	放射線	化学療法
		×	×	△
	急性期はすべて送る。治療後の維持療法は実施。			
医師	2週間に1回、中部病院とWebカンファレンスを開いている。 総合内科で骨髄腫の患者を治療している。外来・入院の化学療法に対応。 白血病に関しては、内服の化学療法のみ、注射の化学療法は一部対応。			
結論	急性白血病に関しては、診断をつけるために本島の病院に紹介する。			

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

胃・食道・大腸				
北部	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	消化器内科医 常勤6名。胃および早期がんESDは、自己完結。 食道は腹部食道のみ対応。その他は全例他院へ。 大腸は、ほぼ自己完結している。			
医師	消化器内科医 常勤6名 消化器外科医 常勤6名 胸部外科医 不在			
	胃及び早期胃がんESDは自己完結。 食道は腹部食道以外の症例は、中南部の病院へ紹介。 大腸はほぼ自己完結。 放射線治療が必要な事例は中南部の病院へ紹介。			
宮古	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	胃は自己完結。 食道胃接合部がん以外は、全例本島へ。 大腸は自己完結。ただし、腰椎転移や脳転移の放射線治療は本島へ。			
医師	上級医、専門医、指導医がいる。早期がんは内視鏡下手術を行っている。 大腸ESD→導入はまだできておらず、EMRまでである。 食道がん→上部の郭清がいらなさそうな手術を腺がんで行っている。			
	消化器内科・消化器外科の専門医が複数名必要。 化学療法に関しては、中長期的に腫瘍内科医が必要。			
八重山	対応状況	手術	放射線	化学療法
		○	×	○
	胃は自己完結。 食道胃接合部がん以外は、全例本島へ。前後の治療に関しては受けることもある。 大腸（結腸がん）は、ほぼ自己完結。			
医師	胃・大腸ESD→難しい症例は応援に来てもらうが、ある程度は自己完結している。 食道がんは→腺がんの手術は行っているが、扁平上皮がんに関しては放射線治療が絡むので、最初から放射線治療可能な施設で治療選択の説明を受けてもらっている。			
	消化器内科・消化器外科の専門医が複数名必要。 化学療法に関しては、中長期的に腫瘍内科医が必要。 食道がんは手術の難易度が高く、術後管理が複雑なため、積極的に先端病院へ紹介する。 直腸がんは集学的治療（放射線治療）が考慮されるべきである。沖縄県では直腸がんに対する放射線治療が少ないので、放射線治療医の意見を取り入れていくことが重要である。			

離島・へき地における疾患別対応状況・課題

肝および肝内胆管・すい臓				
北 部	対応 状況	手術 ○	放射線 ×	化学療法 ○
	医師	肝・肝内胆管は自己完結。手術・化学療法実施。術前放射線治療は中部の病院へ。 すい臓は自己完結。放射線治療を要する場合は中部の病院へ。		
	結論	放射線治療を要する場合は、中南部の病院へ紹介。 難易度の高い症例に関しては、積極的に集学的治療が可能な施設へ紹介する。		
宮 古	対応 状況	手術 ○	放射線 ×	化学療法 ○
	医師	肝・肝内胆管は手術・化学療法は実施。放射線治療を要する場合は本島へ。 すい臓は手術・化学療法は実施。放射線治療を要する場合は本島へ。		
	結論	この分野は専門性が高く若い人材が少ないため、 5年後、10年後を見据えて今後の人材育成が課題。 難易度の高い症例に関しては、積極的に集学的治療が可能な施設へ紹介する。		
八 重 山	対応 状況	手術 ○	放射線 ×	化学療法 ○
	医師	肝・肝内胆管は専門医2名で、標準治療は対応可。 すい臓は手術・化学療法は実施。放射線治療を要する場合は本島へ。		
	結論	この分野は専門性が高く若い人材が少ないため、 5年後、10年後を見据えて今後の人材育成が課題。 難易度の高い症例に関しては、積極的に集学的治療が可能な施設へ紹介する。		

離島・へき地における 放射線治療・化学療法・緩和ケア 課題と要望

放射線治療

課題	肺がん、食道がん、直腸がん、子宮頸がんなどに関しては、適切なタイミングでの放射線治療適応に関する検討が必須なので、本島との連携が非常に重要となってくる。 しかし、交通費や時間的な制約があり、本島から離島へ放射線治療医が出向くことが難しい。
要望	本島と離島間で、Webカンファレンスを利用して気軽に放射線治療に関する相談ができるようなシステム構築が必要。 これまでもWebカンファレンスについて議論がなされてきたが、現状のシステムは使用しづらく、機能していない。 回線の問題や、電子カルテ（個人情報）の取り扱いについて制約があるので、セキュリティレベルをあげるなど、通信環境の整備を沖縄県に早急に対応してもらいたい。 緩和的放射線治療に関しては、例えば、離島からのアクセスがいい那覇市立病院で、日帰りまたは1泊放射線治療コースのようなものを作ってみてはどうか。

化学療法

課題	がん化学療法の症例増加に対し、化学療法を担える看護師や薬剤師が不足している。
要望	以下の資格を有する看護師・薬剤師の配置を要望する。 ・がん化学療法看護認定看護師 ・化学療法認定薬剤師

緩和ケア

課題	今後、緩和ケア推進に伴い、緩和ケア専門の看護師や薬剤師の配置が望まれる。
要望	第一に、以下の資格を有する看護師・薬剤師の配置を要望する。 ・緩和ケア認定看護師 ・皮膚・排泄ケア認定看護師 ・緩和薬物療法認定薬剤師 第二に、以下の資格を有する看護師の配置を要望する。 ・乳がん看護認定看護師 ・摂食・嚥下障害看護認定看護師